

## 「信濃の国」歌詞の解釈

(出典：市川健夫・小林英一編著 『県歌 信濃の国』(1984年 銀河書房))

\* 信濃の国

大化の改新(645年)以後に設置された行政区画で、現在の長野県はほぼそれと一致している。

\* 十州

州は国と同じ。信濃国が接している国は十カ国で、信州は大国であることを示す。

\* 境連ぬる

境とは国との境界(国境<sup>くにざかい</sup>)の意。作詞者の浅井は最初「連ねる」としたが、それを「連ぬる」と直しているので、より迫力がでるようになった。

\* 国

先述の古代の行政区画。国毎に国府が置かれ、中央から国司が派遣された。武家政治の間も地域の呼称として残り、明治に入って府県制が敷かれてからも、生活の中にはこの「国」が残っている。

\* 聳ゆる

高い山岳がそそり立っている様。作詞者は文語体を好んで使った。

\* いや高く

「いや」は文語で、非常に・極度にの意味。信濃国に高い山岳が集まっていること表現している。

\* 流るる

口語なら「流れる」と表現するところである。

\* いや遠し

川が遙かに遠く流れていくことを示す。

\* 松本

松本盆地(松本平)。犀川が作った平地で、安曇野も含んでいる。松本市役所の標高は592m。

\* 伊那

伊那盆地(伊那谷)。天竜川が流れる盆地で、河岸段丘が発達している。伊那市、駒ヶ根市、飯田市が盆地の中心で、飯田市役所の標高は499m。

\* 佐久

佐久盆地(佐久平)。千曲川流域の盆地。佐久市、小諸市が中心都市で、佐久市役所の標高は692m。

\* 善光寺

長野盆地（善光寺平）。犀川と千曲川が合流し、この盆地を作っている。県都長野市役所の標高は 362m。

\* 四つの平

上田盆地・諏訪盆地を含めて、長野県の平地は人口稠密（ちゅうみつ）で、いずれも特色ある地域を形成している。

※稠密：一つのところに多く集まっていること。

\* 肥沃の地

肥沃とは、土地の地味が肥えているということ。

\* 海こそなけれ

長野県が内陸県であることを表現している。

\* 物さわに

物産が豊富であること。

\* 万ず

すべて。「どんなものも」の意味。

\* 足らわぬ事ぞなき

不足することが何もないという意味。

- \* 四方に聳ゆる  
県内どこからも、高山が望まれる状態を表現している。殊に県境には大山脈・大高原が連なっている。
- \* 御嶽（山）  
標高 3,067m の岐阜県境、乗鞍火山帯最南端の活火山。霊峰「御嶽」として信仰されてきた名山。
- \* 乗鞍（岳）  
乗鞍岳、標高 3,026m の岐阜県境、北アルプスの南部にあり、乗鞍火山帯の主峰。馬の鞍に似たなだらかな山容から山名がつけられた。
- \* 駒ヶ岳  
県内に駒ヶ岳は二座ある。木曾山脈（中央アルプス）の通称木曾駒もしくは西駒（標高 2,956m）と赤石山脈（南アルプス）の通称甲斐駒もしくは東駒（標高 2,967m、山梨県境）である。春先の雪形が馬に見えることが山名の由来。
- \* 浅間（山）  
浅間山、標高 2,568m の群馬県境 富士火山帯に属する日本の代表的活火山。
- \* 活火山  
現在火山活動をしている火山。わが国では、浅間山・三原山・阿蘇山・三宅島・桜島など。
- \* いずれも  
どの山も。他の名山とともにの意。
- \* 国の鎮め  
日本の国の抑え。
- \* 淀まず  
「川水がただよいとまらないで」。長野県の河川が、とうとうと流れていく様を表現している。
- \* 犀川  
千曲川最大の支流。槍ヶ岳を源流として全長 157.7km、長野市落合橋で千曲川と合流する。流域面積は約 3,060 km<sup>2</sup>。（※）
- \* 千曲川  
甲武信ヶ岳（南佐久郡川上村）を源流とし、志久見川合流点（下水内郡栄村）で新潟県に入って信濃川となる大河。  
全長 367 km の信濃川のうち 213.5km が千曲川で、流域面積は約 7,409 km<sup>2</sup>。（千曲川の流域面積には犀川も含まれている。※）なお、明治時代までは、新潟県で魚野川と合流するまで千曲川と呼ばれていた。
- \* 木曾川  
鉢盛山（木曾郡木祖村ほか）を源流とし、木曾谷を流れて濃尾平野に注ぐ大河。長野県内の全長は 89.5km、流域面積は約 1,619 km<sup>2</sup>。（※）

\* 天竜川

諏訪湖に発し、伊那盆地を南下して遠州灘にそそぐ大河。長野県内の全長は118.5km、流域面積は約3,704 km<sup>2</sup>。(※)

※ 河川の流域面積は第9回河川現況調査（平成17年基準年）から算出

\* 国の固め

「国の鎮め」と同様の発想で、日本の国を堅固にするものの意味。

- \* 木曽の谷  
主として木曽川の流域である木曽谷のこと。ヒノキなどの美林で有名である。
- \* 真木  
ヒノキの美称。最上の建築材料である木の意味で、ヒノキを指す。
- \* 諏訪の湖（うみ）  
諏訪湖。長野県で最大の湖で、産業面での利用も多方面で進んでいる。
- \* 魚多し  
諏訪湖は長野県の内水面漁業の中心で、魚種も漁獲量も多かった。
- \* 民  
長野県民。
- \* かせぎも豊か  
かせぎは、生業・産業。長野県民の生業が、製糸業を筆頭にして豊富なことを述べている。
- \* 五穀  
普通五穀とは、米・麦・豆・アワ・キビもしくはヒエのこと。主食となる穀物の総称であるが、それは地域により異なり、開田高原のようにソバが五穀に含まれる山村もあった。
- \* 里やある  
長野県内どこでも、穀物など農作物が豊かに収穫されるという意味である。
- \* しかのみならず  
「そればかりではなく」の意味。米作などの主穀農業だけでなく、養蚕業においてもという想いが込められている。
- \* 桑とりて  
桑はその葉を蚕の飼料とする作物。蚕に桑の葉を給餌するために、当時は桑の樹から桑の葉を摘み取った。
- \* 蚕飼（こがい）の業  
養蚕のこと。蚕に繭を造らせて、生糸の原料とする。
- \* 打ちひらけ  
開けること。「打ち」は意味を強める接頭語。
- \* 細きよすが  
「よすが」は暮らしのたよりとするものの意。個々の農家の養蚕は零細で、生活の細いたよりであっても、という意味。
- \* 軽（かる）からぬ  
軽いということを否定して、重いの意。「細き」と対にしてこのように表現した。
- \* 国の命  
日本の国の運命。
- \* 繋ぐなり  
永続させているのである、という意味。

- \* 尋ねまほしき  
訪れてみたいものだ。「まほし」は助動詞で、願望の意を表す。
- \* 園原  
古来からの歌枕で、ほうきを立てたようで、近寄ると見えなくなるという伝説の帚木（ははきぎ）があったという。下伊那郡阿智村
- \* 旅のやどり  
旅行で宿をとるところ。宿泊するところ。
- \* 寢覚の床  
木曾郡上松町。  
浦島太郎が竜宮城から帰ってやどりをしたという伝説がある。
- \* 木曾の棧（かけはし）  
木曾川の絶壁を通る木曾路の難所で、丸太を藤づるで組み上げて、絶壁に取り付けたもの。芭蕉の俳諧で有名な棧は、木曾郡上松町にあった。  
芭蕉の句 一棧や いのちをからむ 鶯かつら一
- \* かけし世  
棧をかけたその昔の時代。正保4年（1647年）まで棧がかけられていた。
- \* 心してゆけ  
気をつけて注意して行くようにの意。木曾の棧をかけた時代を心に留めながら、久米路橋を注意しながら行くようにという想いが込められている。
- \* 久米路橋  
長野市信更（しんこう）と長野市信州新町との間、犀川にかかる橋。かつて、久米路峡は犀川の激流が岩をかみ、怪岩奇岩が顔を出し、天下の絶景であったと伝えられている。
- \* 筑摩（つかま）の湯  
名湯のひとつ、松本市美ヶ原温泉郷（山辺温泉）もしくは浅間温泉を示すのであろう。
- \* 月の名に立つ  
中秋の名月の時の、月見で有名となっている名所の意味。
- \* 姨捨山（おばすてやま）  
現在の冠着山（かむりき（ぎ）やま）、現在の姥捨山などとする諸説がある。月の名所であり、棄老伝説の山である。
- \* しるき  
著しき。
- \* 名所  
伝説的に和歌や漢詩の題材とされてきた風光・由緒をもって著名なところ。古歌に詠まれてきた歌枕。

- \* 風雅士（みやびお）  
風流な歌人や詩人、漢詩や和歌を詠む人の意。
- \* 詩歌（しいか）  
漢詩や和歌を歌い込んで。
- \* 伝えたる  
今の世まで伝えている。

## \* 旭将軍

源義仲の通称。源平の争乱の中で、旭日昇天の勢いで天下の実権を握ったので、こう称された。

## \* 義仲

源義仲（木曾義仲） 久寿元年（1154）～元暦元年（1184）

木曾で育った源氏の武将。複雑な政争の渦に巻き込まれ、近江国栗津で敗死。

## \* 仁科の五郎信盛

出生年不詳～天正10年（1582）

武田信玄の五男で仁科氏を継ぐ。織田信長の軍を高遠城に迎え、落城の際に自害（享年26歳）。

## \* 春台太宰先生

延宝8年（1680）～延享4年（1747）

飯田藩士の家に生まれる。儒家。古学派の荻生徂徠の門人。

## \* 象山佐久間先生

文化8年（1811）～元治元年（1864）

公武合体派であって、京都三条木屋町で暗殺される。

## \* 此国の人

信濃国の出身の人物。浅井泷が名を挙げた4人、すべてが信濃の人とは言えないが、信濃国にはゆかりがあった。

## \* 文武の誉

学問すなわち文、及び軍事すなわち武に、傑出して優れているという名誉。

## \* たぐいなし

他に比べるものもなく、各段に優れているということ。

## \* 山と聳えて

山のように高く聳えていて。木曾義仲らの名を挙げた偉人の名誉が、際立って高いことの形容。

## \* 世に仰ぎ

世の中の人達が振り仰いでいる（顔を上に向けて高い所を見る）。

## \* 川と流れて

川のように永遠に流れていて。

## \* 名は尽す

名声は永久的で尽きてしまう時はないという意味。

\* 吾妻はやとし

『古事記』・『日本書紀』の神話では、日本武尊は信濃国に入るとき、浦賀水道が荒れていて人柱となった妻の弟橘姫（おとたちばなひめ）（注）のことを思い出して「あずまはや」と言ったという。

注）日本武尊が東征の折、相模（現 神奈川県）から上総（現 千葉県）にわたろうとしたときに浦賀水道で暴風に見舞われた。これを鎮めるため弟橘姫が人柱として入水たとされている。

\* 日本武（やまとたけ）

景行天皇の皇子とされる日本武尊（ヤマトタケルノミコト）。

父の天皇に九州の熊襲征服、続いて東国の蝦夷征服を命ぜられていたという。

\* 碓氷山

ここで歌われている碓氷峠は、古代の碓日坂（うすいさか）、現在の入山峠を指している。

\* 穿つ（うがつ）

穴を開ける。トンネルを開ける。

\* 隧道（とんねる）二十六

隧道は鉄道のトンネル。信越本線開通の時、軽井沢―横川間は26のトンネルで結ばれていた。

\* 夢にもこゆる

夢のようにも、あの難所であった碓氷峠を越える。

\* 汽車

汽車は、蒸気機関車（SL）がひく列車。

\* みち一筋に

汽車が一筋の線路をひたすら走るように、一生懸命に、一心不乱に。

\* 学びなば

学問を学んだなら

\* 劣るべき

劣るはずはないの意味。「や」は反対の助詞で、係り結びで「べき」と連体形を結んでいる。

\* 古来

古い昔からずっと。作詞者の浅井洌にとっては、一つの歴史的な心理として示されること。

\* 山河の秀でたる

高く聳える山岳や遠く流れる大河など秀麗な自然に恵まれている。

\* 偉人

ことに優れた人物。偉人の出身を特に誇りとして、それを愛郷心の支えとする思想が背景にある。

\* 習い

世の中のきまり、常に成り立つ法則的なこと。秀麗な大自然と偉人の出現とが直結することを説いて、この歌を歌う長野県人を激励している。